

	<h1 style="margin: 0;">箱根駅伝 花の2区</h1> <p style="margin: 10px 0 0 0;">SCE・Net 小林浩之</p>	<p style="margin: 0;">E- 98</p> <p style="margin: 10px 0 0 0;">発行日 2017.6.5</p>
---	---	---

東京大学が箱根駅伝に出場したことを知っているだろうか。第 60 回大会（昭和 59 年）のことである。当時の出場校は、通常は 15 校（現在は 20 校となっている）であったが、60 回の記念大会ということで 20 校であった。結果は 20 校中 16 位法政大学、17 位東京大学 18 位明治大学、19 位東京学芸大学、20 位慶応大学とあり、その後、この駅伝を席捲することになる山梨学院大学の初出場、青山学院大学の復活はまだその兆しも表われない時期である。と同時にその後 2 度と出場の機会のない学校も数校並ぶ。箱根駅伝自体がそのレベルであったと考えてよい。私は昭和 58 年に東京本社転勤となったが、私の同僚が正月休みになる前に、応援に行くと言ったのを覚えている。彼は、東大の陸上部の出身であった。私自身は、それ以前に早稲田の中村監督と瀬古利彦のことは知ってはいたが、その時から初めて箱根駅伝の存在を意識し始めたことになる。昭和 62 年には日本テレビがこのレースのテレビ中継を始め、昭和 64 年には全中継することになる。このことにもよって、全国に広く関心を持たれる正月 3 日（日）の行事となり、社会に大きく認知される。私が応援に通い始めたのは、昭和 61 年、東戸塚（これは駅名であって地名としては横浜市戸塚区品濃町となる）に居を構えてからになるが、私にとっても、新年の行事として、定例化したのはその少し後の平成 2 年に始まる。必ずしも毎年ではないが、品濃町から旧東海道の尾根道を越えて、国道 1 号線の平戸小入口の信号のあたりで箱根駅伝を応援することになる。そこは権太坂坂上から坂下に下りてくる部分でもある。読売新聞が配る応援の小旗を振りながら選手を迎える。沿道の観客はほとんど常連の人であり、その人たちにとっても新春を迎える恒例の行事である。そこでは、周囲に住む人たちの新年の挨拶の場である。平成 14 年のことであるが、当時 84 才のお婆さんと話したことがある。毎年来ているというその女性は三浦一族の流れをくむ武家の出と言われた。初めて遇った女性とどうしてそのような話になったのか記憶にはないが、要はそんな雰囲気、ここらあたりの 1 号線沿いにあると言ってよい。

1. 花の 2 区

1 区は大手町を出発点として鶴見の中継所に至る。この鶴見から戸塚の中継所に至る区間が 2 区であり、往路の勝敗に大きな影響を持つ区間であり各校がそのエースを起用するから、この区間は花の 2 区と言われる。距離は時々変わるが現在は 23.1 km で必ずしも最長とは言えないが、長い。ただ、旧東海道では江戸を

出て、海外線近くを歩き、箱根駅伝では海に添った平坦な1号線を走り、保土ヶ谷を過ぎたところから有名な権太坂を登る。

旧東海道と現在の1号線(東海道)は、当然ながら合体されたり、並行したり、クロスしたりしながら東京から大阪に向かう。ここ横浜では一度平行に離れたものが、保土ヶ谷本陣前で合体する。旧東海道はこれからしばらく1号線と並行しながら、北側のJR東海道線にそってしばらく続くがやがて、上り坂に向う。権太坂を登ることになる。現在の光陵高校の前を抜け境木地蔵に至る。この辺りは旧東海道としての道がそのまま平戸の尾根道のように続き品濃口付近まで続く。旧東海道をそのまま伝える数少ない場所の一つであり、品濃一里塚は珍しく往時のまま残る。権太坂は江戸を出て最初の難所と言われ、箱根駅伝においても大手町を出て最初の難所といわれる。ただ、箱根駅伝の選手たちは1号線を走るから、旧東海道ほどの急坂を上るわけではない。このあたり、1号線は旧東海道のおそらく標高で言うなら30メートルは低い。それでも、1号線上には権太坂上という交差点名があり、私の応援位置はそこから坂下口という交差点に向って下ってきたところで、選手たちの勢いもすごい。あっという間もなく、選手たちは国道を下り抜ける。その後の5kmは旧東海道とは不動坂の交差点からしばらく離れるが、旧東海道の大坂に相当する長い坂道を戸塚の中継所に向って登ることになる。この登りも走者を痛めつけるという。この区間でいわゆる、ブレーキによる脱落、ごぼう抜きによる躍進がみられるのはこのコースの難しさによるところが大きい。要は距離が長いうえ、上り下りの急で長い坂道をこなす必要があることから、各校はそのエースを投入することになる。



2. 記憶に残る花の2区を走った選手たち

最近、山の神ということが喧伝されることも多いし、事実往路の最終区で劇的な場面を作り出すことは多い。しかし、箱根駅伝は花の2区を走る選手たちとともにあったとあってよく、彼らが箱根駅伝というものを有名にした。

瀬古利彦の名前をまず思い出す。かれは1977年(53回)から1980年(56回)4回2区を走った。そのうち2回は区間賞を獲得する。学生時代からすでに、マラソンランナーとしても日本の第1線であったが、全盛期のモスクワオリンピックは西欧諸国とともに日本がボイコットし、その後のロスでは調整のミスもあってメダルは実現できなかった。さらに、3度目のオリンピック、ソウルがマラソンランナーとして最後の舞台となった。その瀬古を育てた伯楽として名の高いのは中村清監督である。彼は魚釣り中の事故死に至るまで逸話の多い人であるが、瀬古を育てたと言うこと以外に伴走車から身を乗り出して、“都の西北”を歌って、走る選手を激励したというのはあまりにも有名で印象深い。中村監督に限らず、手を差し伸べんばかりの伴走は、スポーツとしての後ろめたさを感じさせる。そのせいかどうかは知らないが、いったん1990年に伴走車は廃止される。その後2003年に運営管理車として復活する。名前が変わったように、伴走車としてのルールは整備され変わったに違いない。校歌などの形で檄が飛ぶことはない。

ちなみに、私が最初に関心を持った60回大会の区間賞は大東文化大の米重修一と記録にあるが、彼もソウルオリンピックの5000mと10000mを走った。

オリンピック選手といえば順天堂大の沢木啓祐で1963年から1966年まで4回、2区を走った。そして2度のオリンピックを経験することになる。1964年から1966年日大の選手として活躍した宇佐美彰朗も1966年沢木とともに2区を走った。瀬古が登場する前の日本マラソン界の第一人者の一人であった。

櫛部静二という67回大会(1991年)、68回大会で2区を走った有力な選手がいた。67回大会の時、彼は私の目前を先頭で通過した。通常、私は選手が通り過ぎると自宅へ戻り、TVで続きを見る。その時TVで観たのは、脱水症状を起こしてふらつきながら辛うじてタスキを渡す姿であった。彼くらい大学のエースクラスの選手でもそのようなことが起こるコースなのである。

瀬古利彦が去った後この2区の様相は変わる。外国人留学生とその選手たちを擁する山梨学院大学の躍進である。2区はオツオリ、マヤカという選手たちである。山梨学院大学はオツオリを有して68回大会(平成4年)に初優勝を果たす。その中で健闘したのは、たとえば早稲田の渡辺康幸であり、71回と72回は区間賞を獲得する。そのあとは順天堂の三代直樹で75回の区間賞と後のモグスに次ぐ区間歴代3番目の記録を持つ。ただ、故障によってオリンピックにはでていない。渡辺康幸はオリンピックに選ばれながら、実際には故障のため走れなかった。ハーフマラソンを越える距離を大学生が走るのはあまりにも過酷なことで、そのための練習が自らの骨や筋肉を傷めることになるのだろう。現実、三代や渡辺以外にも期待されながら、陸上競技の舞台から若くして去らざるを得なかった選手

は少なくない。

山梨学院大はオツオリ、マヤカそれぞれの活躍で 67 回から 71 回にかけて 68 回の初優勝を含め優勝を 3 回記録する。その後、モカンバ、モグス、という選手たちがそれぞれ 2 区を 4 回走り、山梨学院大は常に優勝争いに参加するが、実際には果たしてはいない。ただ、モグスは、この 2 区の区間賞を 3 回獲得し、歴代 1, 2 位の記録を残している。ダニエルは古豪日大を復活させたのだが、この 2 区で 20 人抜きという記録も持っている。ブレーキとは逆の話であるが、そのようなコースだということでもある。ただ、この間も私は応援に大抵は出かけたが、外国人留学生たちの、あまりに早い走りに一種のしらけを覚えて面白く感じなかったのは正直なところである。

そして今年

今年も道路端の木造りの蕎麦屋は 15 年前と同じようにひっそりと、しかし、新春の陽光をあびて佇んでいた。恐らく、しばらく昔、旧東海道の道端から 1 号線の道端に移ってきたのだろう。2 区を選手たちが駆け抜けるとき、この店の開店にはまだ早い。今年(第 93 回)では 神奈川大学の鈴木健吾が多くの地元の声援を受けながら、1 位で、青山学院大の一色恭志が 2 位で権太坂を駆け下りた。このことは勿論、後で知るに過ぎないが、外国人留学生の参加は 3 名でワークナー・デレセ(拓殖大)の 10 人抜きの活躍はあったが、日本人選手を脅かすにはいたっていない。留学生ランナーの活躍が目立たなくなったのは、平成 24 年頃からの傾向である。アフリカのランナーたちの日本への留学は魅力が小さくなったせいであろう。今年、結果的には、2 区の 1 位と 20 位のタイム差は 5 分強で、各校の力が近接した穏やかなレースとなった。

3 年連続優勝となった外国人留学生が走らない青山学院大学を次はどこがおびやかすのだろうか。

ここを走るのはオリンピックを背負って立つべき、いわばエリートランナーである。

ただ、六大学の弱い競技は面白くない。

参考文献

- ・ “箱根駅伝 2 区の記録”
<http://www13.plala.or.jp/jwmirat/zatsugaku/kakuku/2kukiroku.html>
- ・ “第 93 回箱根駅伝コース-知恵蔵” <http://japonyol.net/hakone-ekiden.html>
- ・ “旧東海道マップ” <https://ssl.gpacycling.net/tokaido/tokaido.html>